

第8期宇治市生涯学習審議会 会議録

名 称	第8期宇治市生涯学習審議会 第3回審議会						
日 時	平成29年10月4日(水)午後2時~4時20分						
場 所	生涯学習センター 2階 一般研修室						
出席者	委 員	×	岩井 浩	○	佐藤 翔	○	藤林 弘
		○	内田 徹	○	佐藤 るり子	○	向山 ひろ子
		○	奥西 隆三	×	杉本 厚夫	×	森川 知史
		○	木村 孝	○	長積 仁	○	六嶋 由美子
		○	切明 友子	○	西山 正一		
		○	小宮山 恭子	○	林 みその		
	事 務 局	×	岸本 文子(教育部長)				
		○	藤原 千鶴(教育部参事(兼)生涯学習課長(兼)生涯学習センター所長)				
		○	瀬野 克幸(教育支援センター長)				
		○	福山 誠一(教育支援課長(兼)青少年指導センター所長)				
		○	安田 美樹(中央図書館長)				
		○	林 達哉(中央図書館主幹(兼)図書係長)				
		○	前田 暢(生涯学習課副課長(兼)生涯学習センター主幹)				
		○	植村 和文(生涯学習課生涯スポーツ係長)				
		○	高橋 紀子(生涯学習課事業係長(兼)生涯学習センター主査)				
		○	野口 里佳(生涯学習課生涯学習係長)				
		○	志賀 清泰(中央図書館図書係主任)				
		○	粕谷 祐次(生涯学習課生涯学習係主任)				
		○	太田 悠(生涯学習課生涯学習係主任)				
傍聴者	0名						

会議要旨は、下記のとおりである。

• 第2回審議会の会議録について

訂正がないことを確認し、ホームページで公開する。 委員了承

1. 報告事項

➤ 平成29年度やましろ未来っ子みんなでHUGフォーラムについて

(事務局)

平成29年8月27日(日)久御山町中央公民館にて開催。当日は「いきいき生きる力を育む防災学習~つながる・つづける・つたえる~」という演題で、特定非営利活動法人さくらネット・河田のどか氏が講演をされた。シンポジウムでは、コーディネーターとして長積委員長、シンポジストとして西山委員が参加された。

(委員)

防災関連の委員長の質問は、具体的で答えやすかった。結論から発言すると冷たい感じになるかもしれないが、とはいえあまり長く話していても自分の言いたいことは伝わらない。あのような大きな会場で話すときの留意点であり、勉強になった。

(委員長)

講師は非常に経験豊富な方であった。防災甲子園という高校生が発表の場があり、そこで災害の際に無事な家には旗を立てる事例や、小学生が防災のきっかけのために自分達のまちのことを勉強した話、きっかけはジャムづくりだったなど、様々な事例があった。シンポジウムなどでは、話を聞いて終わりではなく、内容を自分達のまちに当てはめて、まちづくりや社会教育について考えてみるのが大切だと思う。

➤ 平成29年度近畿地区社会教育研究大会(京都大会)について

(事務局)

平成29年9月7日(木)京都テルサにて開催された。今年度は京都大会なので、例年11月に開催される京都府社会教育研究大会も兼ねている。全体会では、「和歌と披講」という演題で、公益財団法人冷泉家時雨亭文庫常務理事・冷泉貴実子氏より講演があり、京都府立鳥羽高等学校披講研究部の生徒による披講の披露もあった。午後は分科会に分かれての事例発表があった。実行委員、運営協力を含め9名の委員が参加した。

(委員)

運営協力者として参加したため、弁当やアンケートの回収をしたり、分科会でもマイクの受け渡しなどで動いており、あまり発表の内容は聞けなかった。全体会の様子は小さいモニターで見えていたが、話は面白かったので、次回はゆっくり聞きたいと思った。

(委員)

第3分科会では、兵庫県上郡町の社会教育委員と学校教育課の協働についての発表だった。7つの小学校が3つに統合され、バス通学が長くなり、地域とのふれあいがなくなったため、スクールバスを時間差で走らせ、大人と子どもがつながる機会を増やしたという。その地域に、教育に関わっていた人が多く、その人達を中心に進めたとのこと。長く続けていると子ども達が慣れてきて荒っぽい言動をしたりして、辞めてしまう人もいたので、集まってお茶を飲みながら話せる機会を設定したとのこと。うまく進んだのも、社会教育委員と学校教育課の職員のきめ細かい心遣いのおかげだと思った。

(委員)

全体会講演では、昔は月を基準にした暦を使い、日本人の身の丈にあった言葉や文章があると話されていた。第4分科会では、奈良の大宇陀という朝焼けが美しい町で、町おこしをしたところ、予想外に観光面で多くの人を訪れたという発表だった。電車もバスもないのは不便を感じるが、これが数十年後にむしろ地域の良さになるかもしれないと感じた。

(委員)

全体会の講演を聞き、和歌は遠い世界と思っていたが、鳥羽高校は授業で取り入れ、秋と春に歌会をしているという。ふだん意識しないが、日本人に染み付いていること、例えば今は気温で四季を感じるが、昔は光で四季を感じていたということを聞いて、日本のことを再発見する機会になった。第5分科会では、和歌山県紀美野町の、生石(おいしい)山の環境保全をしている団体の発表だった。学校ぐるみ、親子や地域で身近なことから行い、川の清掃の後でバーベキューをするなどしているとのことだった。

➤ 第59回全国社会教育研究大会(北海道大会)について

(事務局)

平成29年9月12日(火)・13日(水)札幌コンベンションセンターにて開催された。全体会では、「思うは招く～夢があればなんでもできる～」という演題で株式会社植松電機代表取締役・植松努氏より記念講演があり、続いて「まちづくり・人づくりに地域ぐるみで取り組む社会教育のあり方」とのテーマでパネルディスカッションが開催された。13日は分科会に別れ、昨年度に引き続き小グループでのグループワークを行った。

(委員)

アトラクションは江差追分で始まり、記念講演は、夢をあきらめずにロケットを飛ばした講師によるもので、学校の授業等でも講演をしており、話し慣れた方だった。パネルディスカッションでは、新しい全国社会教育委員連合会長が「行動する社会教育委員が流行っているが、社会教育委員は何が問題なのかを考えるもので、行政と同じようなことをしてはいけない」と話されていたのが印象的だった。分科会の小グループでは、北海道岩見沢市の話で、祭りで社会教育委員のブースを出展し、社会教育委員の役割についてPRしたとのことだった。我々にもまなびんぐがあるので、何かできるかもしれないと感じた。社会教育委員には、人材育成について期待しているという、行政職員の話も聞けて良かった。

(委員長)

社会教育委員として、我々が何か情報発信する機会があれば利用するのもいいのではないかと。我々が自分達の立ち位置を見直す機会にもなると思う。

(委員)

記念講演の講師は、話し慣れていて非常に面白かった。子どもの夢を「どうせ無理」と言わず、様々な方法で夢を応援したいという話だった。娘に聞いてみると理系の人の間では有名な人らしく、YouTubeでの再生が200万回を超えているという。パネルディスカッションではコーディネーターの采配が素晴らしく、会長らも巻き込まれて、「人はいつでも学び始められる」ということに気付いて良かった。分科会では、中標津町では子育てがしやすく、シングルマザーが全国から集まってくるので人口は増えているが、文化センターや児童館などの公共施設が満員状態になることや、彼女達も昼間は働いているので、地域にあまり協力してもらえないことが課題だと話していた。難しいことだが、ばらばら

にある施設を一か所に集めて、バスなどで行き来できるようになれば理想だと言っていた。市域が広いと何かと移動も利用も大変だが、宇治は動きやすいと感じた。

➤ 第27回紫式部文学賞受賞作品について

➤ 第27回紫式部市民文化賞受賞作品について

(事務局)

前者は「浮遊霊ブラジル」、後者は詩集「キハーダ」と発表されている。授賞式は11月19日(日)に文化センターで開催される。

2. 協議事項

➤ (仮称)宇治市図書館事業計画(計画案)について

(事務局)

前回の当審議会で多数意見をいただき、反映し一部改めたものを今回提示する。主な変更点については、以下の通り。

・5つの柱について文言を修正し、「1.読む楽しさ、学ぶ喜びを創出する図書館」「2.情報の拠点として地域を支える図書館」「3.地域文化を未来につなぐ図書館」「4.誰もが利用しやすい図書館」「5.人とともに成長する図書館」に改めた。

・それぞれの施策が必要であることの説明として、新たに「背景」項目を設けた。

・学校等との連携の部分で、「読書力の向上につながる取組を行う必要がある」と課題をより明確に記述した。読書の楽しさを伝える行事や企画により、児童・生徒の読書力向上に努める。

・情報サービスの充実面では、レファレンスとフロアワークを「環境の整備」という項目にまとめる。庁内関係各課との連携では、「歴史、観光、お茶、源氏物語」と、より具体的な文言を追加。

・外部施設で貸出券の発行申込・返却図書の受付等を検討する。

・「図書館利用が困難な利用者へのサービスの充実」では、「高齢化社会に対応した図書館サービスを検討する必要があります。」の文言を追加。

・図書等の宅配・郵送サービスは、まずは障害者を対象に検討する。

・先進事例などの情報収集や調査研究を行い、次期計画に反映させる。

・組織的な研修体制を確立し、職場内外の研修を充実させる。

(委員)

現代の図書館が盛り込むべき内容はほぼ網羅できていると思う。どういう図書館にしたいか、また図書館に何を期待するか、などについて意見をいただきたい。

(委員長)

財政との兼ね合いもあるので、できることとできないことがあるだろうが、様々な意見を出していただきたい。また、「高齢化社会」という記述について、宇治市の現在の高齢化率はいくつなのか。数値によって「超高齢社会」など適切な語句に修正した方が良い。

(事務局)

宇治市の現在の高齢化率は28%なので、「超高齢社会」に修正する。

(委員)

ティーンズコーナーについて、現在1,000冊ほどそろえていると聞いている。青少年の来館者が少なく、利用のきっかけづくりや読書週間の形成が課題となっている中、具体的な取り組みとして部活動に役立つ資料の収集や、ブックリストの作成が挙げられているが、他市では、ティーンズコーナーの横に学習スペースを設けているところもある。ティーンズの読書離れを解決するためには、それだけでは不足ではないか。

(事務局)

中高生の関心を得られるような部活動の図書をきっかけとして、まずは図書館に来てもらう。その後にブックリストで本に興味を持ってもらいたいと考えている。勉強コーナーや様々な事業が考えられるが、まずは最初の取り組みとして二つを考えている。

(委員長)

実際部活動をしている中高生が開館時間に来られるのかという問題がある。高校生などは勉強コーナーがほしいと思っているかもしれない。

(委員)

一般的・平均的な図書館利用のサイクルは、小学校低学年がピークである。その後、ティーンの利用が減り、20代30代の利用が底になる。子育て期には女性が使うようになるが男性が利用するようになるのは定年退職後。子育てから離れた女性は図書館から去っていくというのが平均的な図書館の使われ方である。中高生が来ないのは活字離れというより忙しすぎるのが背景にある。学習スペースを作るというのも一つの手だが、本好きの人が集まるだけであまり効果は望めないし、スペースが必要となる。今の立地で勉強のために図書館に来るかということを考えないといけない。部活動のための資料収集は他の図書館ではあまり行われていないが、学校と連携して、学校図書館で集めきれない資料を収集するというのを周知できれば図書館に来るきっかけになる。

(委員長)

今の意見を読み取れるように表現のしかたを工夫する必要があると思う。学校の連携といた部分との施策の連動性も重要だと思う。ティーンが直面している問題の解決の場所が図書館にあるということが伝わればいいのだが。

(委員)

学校との連携という点では、司書が全校配置されていないとうまく進まないと思う。

(事務局)

学校図書館への司書配置については、学校教育課の所管となっている。我々としては、市立図書館と学校図書館の連絡会で連携を深めたい。

(委員)

学校図書館と市立図書館との連携がうまく取れれば、分館を増やさなくても利用率上昇に繋がるかもしれないので検討してほしい。

(委員長)

どんなことが実現できるか。もちろん実現性のあるものを書いてもらいたい。

(事務局)

「子どもの読書活動推進計画」が別があり、その中で学校図書館について触れている。同計画と整合するよう事業計画を作成する必要がある。

(委員)

学校図書館同士の「ネットワーク作り」といったことも必要になるが、そこを公共図書館が学校図書館にお願いするのは難しいと思う。

(委員)

利用困難な人への具体的取り組みは、非来館型サービスの検討、出張おはなし会とある。車に乗れなくなって、図書館に行きたくても行けなくなった人に、この内容ではカバーできないように思う。配本所も増やしているようだが、地図での把握や施策の補充があればと思う。

(委員長)

例えばどんなことが書かれれば良いだろうか。

(委員)

木幡の御蔵山地域は、近くに公共施設が少ない。京都市の図書館が利用できるようになったのでそちらを利用している人もいるが、少年院跡地に何か公共施設を作って図書館サービスを展開してほしいという声がある。東宇治コミセンも遠く、手軽に行ける場所があればと思う。新しい建物を増やすことは難しいと思うが。

(事務局)

どの図書館も交通アクセスに課題があると認識している。厳しい財政状況の中、新しい施設の増設は難しい。今ある資源をどううまく使えるかということになる。他の公共施設での返却ポスト設置や、外部施設での貸出券発行や、返却受付の検討で利便性の向上を図っていきたい。

(委員)

「ハンディキャップサービスの充実」とあるが、ここに高齢者は含まれるのか。

(事務局)

前回の案では、図書館利用が難しい方全体を対象に、郵送サービスやコンビニでの受け取りなどを考えていたが、全体に広げるのは財政的・人力的に厳しいため、まずは障害者のみを対象にして、サービスを展開してノウハウを蓄積した上で、徐々に広げていきたい。

(委員)

ここでの障害者とは障害者手帳の保持者をさすのか。

(事務局)

郵送料が半額になる制度の利用を想定しているが、条件について明確に記載がされていない。これから調査していきたい。

(委員長)

そういう制度があるなら利用して、限られた資源をうまく使えば良い。

(委員)

利用困難な人へのサービス充実ということだが、駅前の施設を使えないか。月に1回やそれ以下でも、配本サービスなどしてみたら、通勤通学の人に利用してもらえないか。市営駐輪場の一角などを利用できれば、駅にも広がっていきけるのではないか。利用の多い近鉄大久保駅や小倉駅、JR六地蔵駅や宇治駅などを考えていただきたい。実現は難しいと思うが、本当に使ってもらいたいのなら、こういうことも考えてはどうか。

(事務局)

ゆめりあうじは、JR宇治駅に近く利便性もいいので、配本所以外の利用を検討している。関係課と協議の上、進めていきたい。

(委員)

人がいないとやりにくいと思う。駐輪場は雨風の問題から難しいところもあると思うが、ゆめりあうじの他にも使えそうな場所でやってみて広げていければ。

(委員)

宇治市には、移動図書館はないのか。

(事務局)

以前、図書館が一館しかなかった頃に実施していたが、東宇治と西宇治に図書館ができ、利用が大幅に減ったため廃止した。代わりに配本所を設置している。

(委員)

車社会が進んで、全国的に移動図書館は減った。それで車での移動ができない年齢になると、不便になってしまうが、移動図書館の復活は費用面でも難しく、利用はあまり増えないだろう。最近は予約配本や郵送という方法が多くなっている。

(委員長)

予約配本は知らなかったが、広報すれば利用が伸びるのではないか。郵送だとお金はかかるが移動の必要はない。移動図書館のニーズはこれからもあるとはあまり思えない。

(委員)

図書館3館はわかるが、予約図書配本所6か所というのは知らない人が多い。広報していくことが大切だ。地域と密着して、プレート掲げるなどでアピールしてはどうか。「こういうことができる」ということを発信しないといけない。

(事務局)

木幡公民館、槇島コミセン、南宇治コミセン、開地域福祉センター、ゆめりあうじ、京都文教大学図書館にある。広報は以前から各配本所でもチラシや貼り紙をしているが、なかなか定着していない。利用数は少しずつ増えてはいるが、まだ知らない人が多い。広報の仕方については今後検討したい。

(委員長)

表現の仕方や言い回しが行政的でわかりづらい。簡単で分かりやすくすべき。「配本所」と書かれてもどういうところか伝わらない。利用者目線の書き方を工夫すべきである。

(委員)

配本所についてはアンケート結果で1/3程度しか知らない。もっと効果的な広報をすべきである。

(委員)

図書館は本がたくさんあるというイメージが強いが、ゆとりのある空間や、いすや机が置いてあって勉強できる空間にしてほしい。私は車で行ってもホッとできないので。本を借りるとすぐに帰ってしまう。本を減らしてでも勉強できる空間がほしい。

(委員長)

蔵書数が減るので難しいのでは。

(事務局)

配置の工夫で対応できるかもしれない。コーナーを作って本を並べるなど。

(委員)

最近は子どもの貧困が問題になっており、家に帰っても勉強できる環境にない子どももいる。安心して勉強できる場所を図書館が提供してはどうか。中央公民館と連携して空いている部屋を開放するなどしたらいいと思う。

(事務局)

せっかくの複合施設なので、場所を借りるなど連携できれば。夏休みは期間限定で中央公民館の実習室が宿題コーナーとして開放されている。

(委員長)

常時となると難しいが週に一回とか、時間を区切るなどすれば実施できるのではないかな。

(委員)

借りて帰るだけでなく、滞在してもらうためのスペースを用意するのがここ 20 年ほどの流れになっている。蔵書数の問題もあるので、除籍基準の見直しをしてはどうか。

(委員)

外国やおしゃれな空間では、テラスなど外で本を読んだり机を置いて勉強している姿を見かける。季節限定で中央図書館の中庭を開放して呼び込んでみるのもいいかもしれない。

(事務局)

中庭の開放は検討している。テーブルやイスを置いていないので、勉強ではなく、読書だけなら期間限定で利用してもらえるかもしれない。

(委員)

人口 15~20 万人の都市で宇治が蔵書数最下位ということだが、市全体で年間何冊くらい購入しているのか。市の様々な部課で、不要になった本などを寄贈してはどうだろうか。

(委員長)

毎年 1 万冊程度購入しているようだが、買った分は捨てなければならない。蔵書数は増やしたいが、収蔵スペースがないことが問題だ。

(委員)

図書館の空間そのものが魅力だと思う。調べものはネットでできるが、図書館の雰囲気や本の匂いや手触りなどを味わってほしい。今年の夏休みの終わりに、「死にたくなったら図書館へ」というフレーズが話題になった。一日中図書館に居ても誰も何も言わない、そういう空間であってほしい。

(委員長)

図書館は情報発信や情報の集積はしなければいけないが、市民にとってホッとするような空間にすることも重要。そういったメッセージを発信する必要がある。

(委員)

さきほどのフレーズは鎌倉市のもの。滋賀県でも以前、学校に行きたくない子が、図書館に行けば出席扱いになるという先進的なことをしていたところがあった。家でも職場でもないサードプレイスとしての図書館という魅力もある。今回の計画案ではあまり入っていないが、要望が多いのであれば雰囲気や空間についても、目指す姿として入れてみてはどうか。

(事務局)

スペースの有効利用など、費用のかからない工夫の部分で、目指すこととしては書けるかもしれない。この計画は今ある施設、予算の範囲内でできる実現可能なことを入れていきたい。中庭活用はできると思うが、資料の充実と余裕ある空間の両立は難しい。

(委員)

私は先ほどの平均的な利用傾向と同じで、小学校を出てから戻ってこない人に属している。6ヶ所の配本所も知らないし、図書館についてあまり考えたこともない。ただ、生活の中で本が必要なきときはあるので、夜に本屋に行き、時々買うが、安いものではない。かといって図書館はその時間には開いていないので行くことはない。宇治市だけの問題ではないと思う。本屋が図書館をするという話もあるが、民間マーケットが担うことはできないのか。一度図書館を案内してほしい。

(委員)

私は現在、車を運転してどこでも出かけていけるが、車を手放してしまうと、図書館には行けなくなる。今は何でも通販で買えたりするが、実際にものを見て、触って、気分で選択して買うということとはできない。最近は、スーパーなどに行く送迎バスが走っているというが、月に1回かそれ以下でも、図書館まで連れて行ってくれる送迎サービスがあれば、行く人が増えるのではないかと思う。子ども達も夏休みなどに図書館に行ってみようとなるのではないか。

(委員長)

地方の高齢者はコミュニティバスで病院や公共施設やショッピングセンターに行くことがある。地域の交流やアクセスについて取り組んでいかなければならないと思う。図書館だけの問題ではない。

(委員)

今後検討するというサポーター制度の導入とはどういうものか。

(事務局)

図書の整理・配架、ラベルの付け替え、季節のイベントの飾りつけなどをサポートしてほしい。また、市民には様々な能力を持った方がいるので、デザインが得意な方にロゴを考えてもらうとか、講座の講師をしていただくなどで助けていただきたい。今後は市民に支えてもらいたい。

(委員長)

「支える」よりも、「図書館を一緒により魅力的に」とか「プロデュース」などの文言が今の趣旨に合うのでは。

(委員)

例えば図書館で講演会やイベントをしてほしいなどと気軽に相談して、話し合っ取り組みをしていけるような仕組みがあればいいと思う。

(委員)

例えば1年ごとに各高校の持ち回りで、高校生に一定期間プロデュースしてもらったら、より図書館を身近に感じてもらえるのでは。

(委員)

4歳の孫が幼稚園の図書室で週に1回本を借りて家で読まなければならない。中学1年生は「宇治学」の副読本を使って文化や歴史を勉強しているようだが、本を読むくせをつけるために、小学校で10分でも毎日本を読むなどのカリキュラムはできないのか。

(事務局)

宇治学の副読本は資料的に読むのではなく、探究的な学びを進めるためのツールである。学校司書は全校配置ではないが、拠点校にいたので読み聞かせをすることもある。担任の先生も読み聞かせをしている。朝の読書はほとんどの学校で、10年以上実施している。活字に接する機会は多いがなかなか次につながらない。さきほどの一般的な傾向のように、小さい頃は図書館に行く子も、部活や受験で行かなくなるのだが、学校では読書の取り組みをしている。

(委員)

小学校の間は1年生から6年生までずっと、少しの時間でもやっているなら、あとは継続できればいいのだが、反動でやめてしまったりするものなのか。

(委員)

少し前の話だが、近所の高校の読書時間が他校に比べてかなり長いということで、市の図書館職員がその高校に視察に行ったことがあったと聞いた。その高校では自習室の利用も多いとの話だった。取り組みによって図書館の利用率も上がるのでは。

(委員)

先ほどのプロデュースの話だが、できればポジティブに、プラスアルファになるような書き方が良い。「手伝ってください」ではなく、地域の人に積極的に関わってもらうことは今後必要になると思うし、高校生に関わってもらうのもいい。図書館のヘビーユーザーの中には、地域が好きで能力や学歴が高い人がいるので、手が挙がるのではないかと思う。予算がない中で、図書館をより魅力的にすることができ、参加する人の自己実現にもなる。

(委員長)

予算も限られており、お金をかけなくてもできることなど、工夫していけばいいと思う。宇治市の図書館が基本的な能力を果たしているのかはわからないが、うまく英知の結集や、次世代につながることを、わくわくするようなことが計画に書ければ。現実的なことも必要なのだが、現実的過ぎないように未来へのわくわく感のある要素があればと思う。

(事務局)

今後について、今回の意見を受けての修正後、計画案を11月に議会に出し、年内にはパブリックコメントを実施する。それを反映した最終案を2月の審議会でお示ししたい。

3. その他

(事務局)

➤ **第35回市民スポーツまつりについて**

平成29年10月9日(月)府民総合運動公園にて開催。

➤ **第36回宇治市「中学生の主張」大会について**

平成29年11月11日(土)文化センターにて開催。

➤ **歴史資料館特別展について**

平成29年9月30日(日)～11月19日(日)歴史資料館にて開催。

➤ **平成29年度第2回子育てサポータースキルアップ講座について**

平成29年11月2日(木)京都府山城教育局にて開催。森川委員が講演をされる。

• **最後に**

(委員長職務代理)

活発な意見が出て、良い会議となった。図書館が宇治市の顔となるように、良い計画ができればと思う。

<次回の会議について>

平成29年12月8日(金)午後3時00分から 生涯学習センターにて